
見えない男 < Don't see >

くいかそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない男 <Don't see>

【Nコード】

N7440T

【作者名】

くいかそ

【あらすじ】

とある幼い少年の、思いやりを描いてみました
ちよっとしたトリックを仕掛けましたので、
ほんのちよっとと暗いかも知れませんが（あくまでちよっと）

(前書き)

11・8・8

活動報告に無粋な付け足しをしました
誤読感をすつきりとさせたい方は、
後書きを読まないことをお勧めします

では、ごうござ

それはとある道の路傍の、草むらの中で、でした。

太くもなく細くもない、ごく普通の舗装道路がありました。両側を住宅街に挟まれた2車線の閑静な道で、片方には白いガードレールのついた歩道もありました。

その道のほとんどの部分は、太陽が照っている時でも車が時々通る音がする以外、何の音もしませんし、日が暮れるとその辺りは完全と言っていいほどの静寂に包まれるのでした。

そんな道の、ある所です。一人のまだまだ幼い少年が、ついさっき転んで擦りむいた右足をびっこを引く様に引きずって、杖をついて歩道を歩いていました。

少年以外に人は誰もいません。辺りはいつも通りの、水を打ったような静けさです。辺りはすっかり傾いた夕日に照らされ、特に家々の塀は真っ赤な夕日に照らされて、静かに燃えている様にも見えませんでした。

少年は公園からの帰り道でした。さつきまで砂山と格闘していたので、手は洗ってあって綺麗でも、爪の間には砂がたっぷり入り、半そでシャツの袖口は水に濡れていました。

いつも通りの静かな歩道を歩きながら、少年はお気に入りの童謡を口ずさんでいました。

そうやってしばらく歩いていると、歩道の脇の草むらで、草をかき分ける音がします。草むらはそんな大きくありません。面積でいえば畳1畳程で、草の高さも、せいぜい大人の膝位でした。

「だあれ？」

少年は幼い声で訊きましたが、草むらからは何の声も返ってきません。

でいるお腹を抱えて蹲ったりします。

「だいじょうぶ？」

男性がそうやってしていると、必ず少年が声をかけました。時には少年のお母さんが風邪の時なんかにやってくれる様に、背中を擦ってあげたり（偶然背中には傷がほとんどありませんでした）、とんとんと叩いてあげたりして、男性が探し物を再開するまでそうしていました。男性は、少年に何も言いませんでしたが、少年も、男性の態度に対して、別に何も思ったりはしませんでした。

「ねえ、タマってどんな色？」

「……おそらく、まだ……赤い」

「赤？かわってるね」

少年は一生懸命探します。

男性も、時々呻いたりしながらも、少年の何倍も真剣に一生懸命探しました。

時計の長い針が幾つかの数字を通り過ぎたころ、辺りからは夕日の炎が消え、代わりに燃え尽きて炭化してしまった様に真っ暗になりました。星は一つもありませんが、等間隔にたった電灯が、頼りなくとも道のアちこちを照らしています。

少年と男性はまだ探していました。

二人が探している間、車も人も猫一匹さえ通り過ぎませんでした。

二人はかなり前から口をきいていなかったもので、二人が草むらを探る音以外は何もしません、まるで真空になったみたいに静かです。ふと、男性の手に何か硬い物が当たりました。

それは、男性が生きていた時、いえ、死んだ時に被っていた、血で赤く染まったフルフェイスのヘルメットでした。

男性は急いで、まるでそれが逃げ出すかのように本当に急いで捕まえ、両手で持って立ち上がり、わなわなと手と声を震わせて言いました。

「み、見つけた、見つけた！見つけたぞ！！」

少年は男性の声を聞き、急いで立ち上がって、男性に言いました。「良かったですね、猫見つかった」

「ああ、ああ」

男性はそこまで言って改めて、今は全然体が痛くない事に気がつきました。そしてそれは少年が擦ってくれたおかげなんだと、唐突ですが直感的にそう思いました。

「ありがとう、本当にありがとう」

そう言って、拾ったヘルメットを左手で抱え、右手を少年に、握手をしようと差し出しました。

が、少年が手を出さなかったので、男性は途中でなくなった首を何度か横にねじり、仕方なく少年の頭を撫でました。少年は特に嫌そうでもなく、どちらかと言えば嬉しそうに、照れくさそうに、はにかむ様に笑いました。そしてそのまま男性に別れを言くと、少年は杖をもって、両親の待つ家へと帰っていきました、

白い杖を持って、少年は帰っていきました。

(後書き)

どうでしたでしょうか？

読み進めると浮かぶ幾つもの『あれ？』を、

『そう来たか！』と驚かせるような、
スパイス風味にしてみました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7440t/>

見えない男 < Don't see >

2011年8月9日03時28分発行